

ヤスパースにおける「暗号」概念に関する一考察 —実存の倫理的生き方との関連において—

豊泉 清浩*

A Study of the Concept of “Ciphers” in Jaspers: In Relation to an Existential Way of Life

Seikou TOYOIZUMI

要旨 ヤスパースの哲学において、実存とは真の自己存在を意味するが、実存は超越者との関係においてのみ存在する。ヤスパースは、超越者がわれわれ人間に対して発する言葉を「暗号」と名づける。

本稿では、ヤスパースの後期哲学における哲学的信仰との関係において、彼が暗号概念をどのように理解し使用しているかについて考察する。その際、主として『啓示に面しての哲学的信仰』（1962）およびザーナーが編集した『超越者の暗号』（1970）をテキストとする。

本稿では、まず暗号の本質として、超越者と暗号の関係を考察し、次に暗号の領域における闘争について見て、それから実存的状況における暗号、つまり実存と暗号の関係を探る。さらに、暗号と神性の関係、超越者の言葉としての暗号の意味について考察する。それゆえ本稿の目的は、ヤスパースにおける暗号概念が実存の倫理的生き方といかに関連するかを明らかにすることにある。

キーワード：ヤスパース 暗号 実存 超越者 哲学的信仰

はじめに

ヤスパース（Karl Jaspers,1883-1969）の哲学において、実存（Existenz）とは真の自己存在を意味するが、実存は超越者（Transzendenz）との関係においてのみ存在する。超越者は、確かに神と言い換えてもよい概念ではあるが、啓示信仰と異なり哲学、より厳密な言い方をすれば哲学的信仰においてわれわれの力を越え、われわれの存在を規定する力ないしそうした存在を超越者と名づける。ただ、われわれ人間は、超越者に触れたり、その姿を見たりすることができない。そこでヤスパースは、超越者がわれわれ人間に対して発する言葉を「暗号（Chiffren）」と名づける。

ヤスパースは、主著『哲学』第3巻「形而上学」において第4章で「暗号文字の解説」について論究している。そこではすでに、暗号は超越者そのものではなく、超越者の言語であるとして考察している。本稿では、ヤスパースの後期哲学における哲学的信仰との関係において、彼が暗号概念をどのように理解し使用しているかについて考察する。その際、主として『啓示に面しての哲学的信仰』（1962）およびこの書の内容を要約する形で1961年夏学期に行なわれた最後の講義をザーナー（Hans Saner,1934-2017）が編集した『超越者の暗号』（1970）をテキストとする。

本稿では、まず暗号の本質として、超越者と暗号の関係を考察し、次に暗号の領域における闘争について見て、それから実存的状況における暗

* とよいずみ せいこう 文教大学教育学部教職課程

号、つまり実存と暗号の関係を探る。さらに、暗号と神性の関係、超越者の言葉としての暗号の意味について考察する。

われわれ人間は、暗号を解読して超越者と連繋する。超越者には、姿形があるわけではなく、人格もない。われわれ人間は限界状況を引き受け、他者との厳しく誠実な対話である実存的交わりを通して生きる過程で、暗号を解読して超越者と連繋する。暗号は、超越者と実存の媒介であり、たとえば辛い出来事や挫折という暗い側面もそうであるが、自然とのかかわり、他者との出会い、文学作品や芸術品との出会いなどもありうる。暗号は自己がどう生きるべきかを示唆し、暗号を解読することは、実存として生きることを意味する。それゆえ本稿の目的は、ヤスパースにおける暗号概念が実存の倫理的生き方といかに関連するかを明らかにすることにある。

1. 暗号の本質

ヤスパースは、暗号の本質について、実存によって感得され、解読されるものであるという観点から考察している。彼は、「暗号の真理は、実存との関係においてある。超越者から実存に対する牽引力は、暗号において言語となる。暗号は、存在の諸空間を開く。暗号は、私が決意することを明らかにする。暗号は、私の存在意識と自己意識における諸々の動きを強くしたり抑えたりする」¹⁾と述べている。実存は、必然的に超越者との関係において存在する。したがって、「実存としてわれわれは、われわれが暗号と称する諸対象において超越者を考える。」²⁾しかも、「その場合、暗号はわれわれの空間を明るくし、決定的瞬間に超越者の言語としてその光度を放射させる。」³⁾もっとも、暗号は超越者の言語であるが、「暗号は、決して超越者自体の現実性ではなく、超越者のありうべき言語である。」⁴⁾暗号は、いわば超越者から発せられる言葉である。それゆえヤスパースは、「ただ暗号としてのみ、われわれは超越者の言葉を理解する。超越者自身は、すべ

ての暗号のかなたにある」⁵⁾という。

ターマン (Paul R.Tarmann) によれば、暗号の語は、ヤスパースの思惟にとって自由概念の重要性をさらに際立たせる。ターマンは、暗号の綴り方は「Chiffre」が伝統的な書き方であるが、ヤスパースが大多数のテキストにおいて、「Chiffer」という独自の書き方をすることを指摘している⁶⁾。ターマンによれば、「暗号 (Chiffren) は、ヤスパースの後期哲学にとって中心である。」⁷⁾「Chiffre」は、暗号、符丁、標語、略号、数字などと訳されるが、この語は、ヤスパースにとっては単なる記号や印とは異なり、実存と超越者との関係において独自の意味を持っている。ターマンは、ヤスパースにおける暗号の語の意味するものについて、次のように述べている。「要約すると、暗号 (Chiffre) はヤスパースにとって「記号 (Zeichen)」や「印 (Signum)」に対する類義語であり、彼が客観的に提示されると同時に主観的に人間の表象力によって具体化されて理解する言葉であるということができよう。暗号は、さらに超越者の暗号 (Geheimzeichen) であり、実存性への道と超越者への道を示すその意味支持者である」⁸⁾と。

ヤスパースによれば、「われわれは、実存と超越者という非対象的なものを思考する対象性を、実存の記号と超越者の暗号と名づける。だから私は、実在性の現象、実存の記号、超越者の暗号を区別する。」⁹⁾第一に、自然、心的生活、社会、歴史のように、異なった実在性の諸現象は、普遍妥当的に記述されるべきである。第二に、実存の一つの記号は、自由である。「第三に、対象が思惟する意識に対するように、超越者は実存に対して振る舞う。可能的実存としての私が、超越者の言語を傾聴する、意識一般の媒体における諸々の表象、形象、思想を、われわれは超越者の暗号と呼ぶ。」¹⁰⁾そして、超越者の暗号を解読するには、実存的経験がなければならない。ヤスパースは、「ただ実存的経験のみが、暗号の意味を解明する」¹¹⁾という。

したがって、真の現実性であり、実存にとって

のみ経験しうるものは、暗号において現在となる。出現する一切のものが、暗号となりうる。自由は、それ自身を明確に確信すればするほど、同時に超越者を確信するが、超越者によって自由は存在する。感覚的に現実的な経験と証明を要求する悟性は、暗号において話すものを聞けず、この言葉において超越者が伝達される実存の自由のみが、それを聞き取る。ターマンによれば、「自由は、すでに暗示を与えられたように、ヤスパースにとって実存の暗号である。」¹²⁾つまり実存の自由は、暗号の領域にある。ヤスパースは、「決定的なことは、そのためにわれわれが発したということ、すなわち自由のみが超越者に関係するということである」¹³⁾という。暗号は、われわれの言語における、また哲学と文学と芸術品における精神的実在性であるが、しかし暗号は決して超越者自体を体現するものではない。人間は、超越者によって自分自身に贈られたと知っているが、超越者は抽象的である。それゆえ、「人間が自分の自由において超越者を固有の現実として経験する時、人間は超越者を暗号を通して明らかにしたい」¹⁴⁾のである。

ヤスパースによれば、「体現するものがなくては私は時間の中で現存在を失い、暗号がなくては実存は曖昧になる。」¹⁵⁾「だから決定的なことは、哲学的信仰にとって包括者のあらゆる様式、とりわけ超越者に関係する実存は、啓示がなくても可能であり、現実的であるということである。」¹⁶⁾つまり実存は、啓示がなくても暗号を媒介として超越者と関係する。それゆえ、「自由な実存は、暗号の言葉を必要とする。」¹⁷⁾したがって、暗号の本質への理解は、暗号がその実存的な力とその言葉の豊富さを取り戻す見込みのための前提である。

ところで、ヤスパースは、「哲学的人間は、彼の歴史性を偶然とのかかわり合いの中で経験し、そして彼の自発性とその都度の所与との並存、彼の大胆と制限との並存の内、暗号において二義的に明るくなる超越者への関係を獲得する」¹⁸⁾という。暗号は歴史的である。「暗号の真理は、

いかなる認識、いかなる理解によってもそれ自体を証明せず、おのおのの単独者の実存的歴史における、暗号の解明する力によってのみそれ自体を証明する。」¹⁹⁾哲学する人間は、思考の避けられない手段として循環を必要とするが、この手段を通じて考えられないものに対し現存在を創造し、彼の実存的経験に対し一つの可能性を開く。「この循環は、想像上の形成物においても実存的現実性においても終わらず、閉鎖しない、超越者に関係する自由におけるように、どこにも窮極的に隠されることなく、無限なものへ開いている。」²⁰⁾

ヤスパースによれば、「暗号は、可能の実存にとってのみ存在する。」²¹⁾暗号の解釈は、解釈者の根源からのみ真理を獲得することができる。これに対して、哲学的信仰と啓示信仰の前提は、根源の経験である。哲学は、おのおのの由来の暗号をわがものにしうる。哲学自身が、その思弁の中で暗号を産み出す。われわれは、いわば超越者の周りに横たわるいろいろな範囲から暗号に耳を傾ける。あるいはわれわれは、暗号をもって超越者に向かって話す。「だからわれわれは、すべての暗号言語でさえ止み、超越者が無知の知、すなわちあの満たされた沈黙において触れられる、深みあるいは頂点へ暗号を越えて達するために、突き進むのである。」²²⁾

ヤスパースは、暗号世界の純粹性のためと暗号世界の内部での二重の闘争について考察している。彼は、「内面的な闘争は第一に、暗号の純粹性のために、神話や啓示信仰における現実化に対して進み、第二に暗号の領域自体において、すなわち暗号に対する暗号において進む」²³⁾という。そこで、「第一の闘争は、暗号世界のために、それを守り、思い違いないそのようなものとして進む。」²⁴⁾哲学的信仰と啓示信仰という両者は、神について話す。哲学的信仰は神について知らず、ただ暗号の言葉を聞く。神自体は哲学的信仰にとって一つの暗号である。そして、「第二の闘争は、暗号に対する暗号において進む。」²⁵⁾

2. 暗号の領域における闘争

ヤスパースによれば、「暗号が実存的感動の中で聞かれる時、暗号の領域における闘争が始まる。」²⁶⁾ 暗号は、超越者に対する近さと遠さという変転する順位の中にある。完全な無拘束においてだけでは知られないすべての暗号に対して、わがものにする 것과拒否、すなわち暗号の領域における闘争が起こる。「本質的なのは、大いに独特な暗号世界の現象の中ですべての暗号を貫徹し、導くものわがものにするための闘争である。このような中心から、すべての暗号に対する態度とすべての暗号とのかかわり合いが規定される。」²⁷⁾ 少数の偉人が、そのような不思議で壮麗な暗号の秩序を生じさせたにせよ、それは包括者の中の一つの秩序であり、それ自体包括的ではない。

ヤスパースによれば、私が一つの暗号を傾聴すれば、私は他の暗号を否認している。われわれが個々の暗号に没頭する時、背後に全体としてのこの領域が闘争の領域としてある。その場合、「暗号における闘争は、超越者に関係づけられている。」²⁸⁾ 暗号とともに真理意志の闘争が起こる。「この闘争は、自分自身に自己をもたらす、あるいは自己を先へ先へと駆り立てる実存の運動である。」²⁹⁾ 真理は闘争がなければ可能ではない。最も厳しい闘争、すなわち自己自身のための真理の闘争が重要である。われわれが暗号を聞くところでは、われわれはすでに関与している。われわれが関与している場合、われわれは単に論理的にではなく、われわれの在り方をもって意図に従うのである。だから、「暗号において相互に理解し合うことは、超越的なものの関連における交わりを意味する。」³⁰⁾ それは、真実なもののための開いた愛しながらの闘いと、閉ざされた愛のない闘いととの相違である。

ところで、ヤスパースは、「自由思想は寛容である」³¹⁾ という。寛容はむしろ、知らない人がいうことを真剣に取ること、耳を傾けること、自分自身を関係させることである。われわれは、暗号

で満たされている闘争の空間の中で、一緒に生きている。ただ実存の歴史的決断によってのみ存在する無制約の真理と、信仰の諸命題において表現される一般的真理とが、区別されるべきである。実存的に現実的なものは証明できないが、しかしお互いに話し合うことにおけるすべての真剣さの前提である。ヤスパースは、「われわれは、単独者としてのわれわれを可能な人間存在の計り知れないものへ広げる諸々の直観の世界によって満たされている。ここにわれわれの自由思想と人道主義精神の掛け替えのない源泉がある」³²⁾ と述べている。つまり暗号は、決して究極のもの、一つの、唯一のものではない。したがって、「われわれに関心を持たせるのは、このようなものとしての真理問題であり、しかも人間が知ることができず、実存的に経験することができるにすぎない暗号のこの真理への問いなのである。」³³⁾

さて、ヤスパースは、超越者の暗号について考察する際、次のように述べている。「私はもう一度繰り返す。すなわち、世界がもはやそれ自体から成り立つものとして、つまり即事存在としてではなく、経過として経験され、思惟される時、超越者は現在である、と。このような超越者は、人間の自由にとっての基準点である。人間自身は、彼の根源において、すなわち全世界を越えて、現存在の自然性を越えてあるものにおいて、自由として明らかになる。」³⁴⁾ つまり人間は、超越者との自由な関係において存在する。

ヤスパースによれば、「決して符合しない、神性の三つの暗号がある。すなわち、一つの神—人格神—神が人間になった、である。」³⁵⁾ この場合、「超越者という一者は、満たされた永遠性である。」³⁶⁾ 超越者と関係する実存同士が向き合う実存的交わりでは、対話の中で厳しく誠実な「愛しながらの闘い」が実現する。したがって、「愛しながらの闘いにおける交わりの実現は、一者の現実性にかかわる。一者はある事柄のための宣伝をするのではなく、交わりを引き起こすのである。」³⁷⁾ 一者の暗号は、すべての他の暗号を越え、暗号の多様

性を越えてすべての暗号の根拠へ、暗号の多義を越えて疑う余地のない一者へ突き進む。一つの神は、世界の中での組織された人間集団の支配を正当化するための内容をもっての独裁を意味する。「人格神の暗号においてのみ、人間としての私は、神としての汝に向かい合っている。」³⁸⁾

3. 実存的状況の暗号

ヤスパースは、「実存とは、人格存在としての自己存在である」³⁹⁾と述べている。彼によれば、「われわれ西洋人は、仮にわれわれがそれを否定するとしても、聖書の人格的な一つの神の暗号に、われわれの暗号言語の一つの本質的な根拠を持っている。」⁴⁰⁾人間においてのみ、われわれは人格を知っている。彼は、「人間に対する神の愛が初めて、神に対する人間の愛を生み出す」⁴¹⁾という。したがって、「暗号としてのイエスカ化身の神としてのイエス・キリストか、これが決定されるべきである。」⁴²⁾そして、「キルケゴールは、その歴史性において実存自身に向きを変えるまったく別な試みをした。」⁴³⁾ヤスパースにおける実存概念は、キルケゴールの実存概念に根拠がある。ヤスパースは、「神の暗号と人間の実存とはお互いに対応している」⁴⁴⁾という。

ヤスパースは、人間が暗号をどのように解釈して、把握するかによって、その人間がどのような人間になるかを示唆すると考える。彼は、「人間がそれぞれの特殊な暗号において自分自身に印象づけさせる仕方は、彼の生きることの契機となる。人間がどのように神の暗号を思惟するかというこの像に従って、彼は自身となる」⁴⁵⁾という。つまり人間は、暗号を解釈することによって、実存となりうる。彼によれば、「事實は探求され、暗号は、実存にとって明らかになるものを表わす。」⁴⁶⁾そしてヤスパースは、次のようにいうことができる。と考える。「人間が暗号においてどのような神を見るかが、人間自身になるものである。人間が自己自身を手に入れようと努力することは、神性を手に入れようと努力することにおい

て成就する。」⁴⁷⁾つまり、人間が暗号においてどのような神、すなわち超越者を見るかによって、その人間がどのような生き方をするかを決定するということである。そこで、実存にとって何を偉大と見るかは極めて重要である。ヤスパースは、「実存たちは、どのように、そしてどのようなものとして偉大なものを見ているかを示すことによる交わりの中で彼らの闘いを導く。何が偉大であるかは、見る者の実存とともに明らかになる」⁴⁸⁾と述べている。

ところで、人間は終末観念とどのように向き合うであろうか。ヤスパースは、「終末の前にいることは、実存を覚醒させる。われわれの日々の現実的に根拠のある終末観念は、人間が彼の実存によって答えるであろう新たな限界状況へ人間を連れて行く。そうでなければ人間は根拠へ歩む」⁴⁹⁾という。すなわち、終末という新たな限界状況に直面することによって、実存は覚醒する。したがって、「特定の実際の終末観念が、終末の暗号の契機となって初めて、実存自身が覚醒する。その時、終末観念と内的回心とがお互いに対応する。回心において、私はいわば私の自由の中のある別のものを私に贈られる。」⁵⁰⁾

さて、ヤスパースによれば、「純粋な思索が超越者である。」⁵¹⁾超越者は、存在論の対象であるが、ヤスパースは独自の存在論を構想している。「われわれは、一つの根本知のために諸々の存在論と存在論的思考方を突破する。これは、存在論から包括者存在論への一步である。」⁵²⁾つまり彼は、存在論としての根本知を、包括者存在論としての根本知から区別する。根本知は、理性の生産物であり、理性の道具である。それゆえ彼は、「われわれは今、限界状況から出発するが、限界状況にわれわれの実存は暗号による解明をもって答える」⁵³⁾という。

ヤスパースによれば、「自由は実存的経験であり、観察しすぎる経験ではない。」⁵⁴⁾自由とは、自分勝手なことをすることではない。「自由があるところでは責任があり、責任があるところでは

負目がある。」⁵⁵⁾ 自己は、負目を引き受けることによって、実存となりうる。実存の覚醒とともに、幸福と不幸を越えて、運命は運命愛で捉えられる。

だから、実存は、厳しく誠実な生き方が求められる。ヤスパースは、「実存は思い切っしてしなければならない。実存は、さらに依然として、決断において、すなわち起こることを聞く途上での決意においてある」⁵⁶⁾と述べている。つまり実存は、決断によって生き方を決する。したがって、「実存は、責めがあるということをどうしても引き受けなければならない。」⁵⁷⁾そして実存は、超越者への眼差しを持ち続ける。「特に実存から超越者への関係は、信仰としてあり、相等性としてあるのではない。暗号は、実存から超越者への関係における具象的になる言語の領域である。」⁵⁸⁾

こうしてヤスパースは、超越することと暗号との関係について、次のように述べている。「超越することはわれわれにとって、われわれ人間が感性的な理性的存在者である限り、われわれが暗号と範疇とを放棄することを意味せず、われわれがそれらをもってそれらを越えて達するが、また即座にそれらへ滑って戻ることによって、それらに捕まらせないことを意味する。」⁵⁹⁾つまり実存は、暗号の解読を通して超越者と関係する。したがって、「実存の超越者への突破による暗号世界の自己止揚は、限界過程としてだけ実現する。」⁶⁰⁾私自身が変わることによって、存在は明白になる。ヤスパースは、実存が暗号を越えて超越者と連繋することを、壮大な空間との関係で捉える。「すべての暗号を越えて超越することにおいて、世界を越えるだけでなく、現存在におけるわれわれの実存の現実性を越えて、われわれは大いなる空虚、無である宇宙、依然として啓示なしにある豊かさへ達する。」⁶¹⁾

ヤスパースは、限界状況に直面するわれわれ人間が、生きる拠り所を何に求めるかに関して次のようにいう。「われわれの有限な人間存在の状況の中で、われわれは二つのことを探る。すなわ

ち、自由にし、触れられない、超越的一者と、有限である無限の言語である。」⁶²⁾つまり実存は、超越者と暗号を探ろうとする。彼は、こうした人間の生き方について、「常に妥当するのは、過去にも未来にも我を忘れず、現在に生きるということである」⁶³⁾という。

4. 暗号と神性の関係

ヤスパースは、われわれが行なうすべてのものは、われわれの知識と技能に依存しているという見解があるが、知識と技能はいろいろな限界に突き当たると指摘する⁶⁴⁾。科学的知識は、二種類の限界に突き当たる。第一に、研究の際に常に前にあり、踏み越えられる限界である。科学の第二の限界は、別の種類である。その限界は、すなわち科学自体が全体として原則的に限定されるということに存する。世界は、決して研究の対象ではなく、カントが名づけるように、研究を導き、統一へ向ける、理念である。ヤスパースは、全体知を否認する。「全体知は生じない、そして別な種類からある、普遍的で単一の知識の形態は、まさに全体知が不可能と理解されるという結果によってこそ存在する。」⁶⁵⁾そして彼は、科学による認識の限界を指摘する。「私が科学において認識するすべてのものを、私は悟性の諸範疇において認識する。すなわちその限界に、私は理性の理念とともに理性によってのみかわる。」⁶⁶⁾また人間は、実存の歴史性において存在する。「そして他方では、人間の実存の歴史性において、人間は自分自身でそもそも初めて自覚し、その歴史性なしには人間はまったく人間ではなくなり、その際に、歴史性であるものは、それ自身で再び逆説的な暗号においてのみ現われうる。」⁶⁷⁾

ヤスパースは、実在の現象、実存の記号、超越者の暗号を区別する。「ここで確かに再び心像、表象が重要であるが、われわれが超越者を示すそのようなものが重要である。われわれは、そのようなものを暗号と名づける。われわれがここでかわり合いがあるものは、示すことのできる現象

でもなく実存の記号でもなく、われわれが超越者に関係するこのような何かあるものである。」⁶⁸⁾しかし、暗号は、何かあるものの認識ではない。暗号は、それが印をつけるものを言い表わすことによって、明らかなる印ではなく、印自体において現在となり、決して他の仕方では現在となることができないものである。これらの暗号は、数千年を通して大量に、非常に多くの人間において、かなり体现した。「暗号は、このような瞬間にそのようにわれわれに語りかけ、屈服させようとする言葉である。しかしわれわれは、理性的存在者として、おのおののこのような暗号を熟考するための能力、他のそれに対してあるものと勝負するための能力を持っている。」⁶⁹⁾初めに、科学的、個別的、方法論的、強制的な認識であるものは、このような気のつかない無批判な拡張によって、人間が頼って、暗号として役立つものになる。

ヤスパースによれば、歴史に基づいて、われわれが内的経験の内に神を有するというに関係なく、神の思想は啓示にとって神学上要求されると同じほどに根源的に哲学的であるということをして、われわれは主張する。ただそれゆえに、彼はそもそも哲学の教授としてこのような題目について論じることができると指摘する。「それゆえ、世界から理解されることができず、世界もまた理解させずに、それによって私が自分の自由を自覚する何かあるものである超越者、そのような何かあるものはわれわれが論じたい超越者である。」⁷⁰⁾なぜなら、われわれは、われわれにとって対象となる、世界の内の事物について論じることができるからである。暗号は、決して超越者そのものではない。

ヤスパースによれば、「われわれは、暗号すべてを体现性、神性そのものと見なす必要はなく、それによって超越者への関係を獲得するために、だがしかしわれわれが常に仮象にあるものに強制されることなしに、暗号にいわば神性そのものの現実化、体现化を生じさせることから、暗号すべてを暗号として聞き、見て、読むことができる。

そのような暗号は、決して神性そのものではない。」⁷¹⁾ところで、暗号はものすごくたくさんある。「決定的なことは、暗号は歴史であり、形態において一回であるということである。」⁷²⁾

ヤスパースは、「われわれが世界の中で認識する対象の何かからではなく、そこからそれが現われるところを、われわれは超越者または神と呼ぶ。われわれは、われわれの自由の全体的な依存を、すなわち超越者の前で気づくことによって、われわれはまさに決定的に世界に関係なくなり、世界からもはや投げ倒されず、世界に屈服させられない」⁷³⁾と述べている。超越者は、われわれの人間存在の根源である。「われわれは、このような超越者の言葉を暗号の言葉と名づける。神そのものは、このような意味で、一つの暗号である。」⁷⁴⁾これらの暗号は、われわれに伝達される。われわれの課題は、これらの暗号を自己目的として学ぶことではなく、われわれがこれらの暗号を根源的に努めてわがものにしようとする時、当然理論的な洞察において努めてわがものにしようとするのではない。

ところで、人間は、自分が包まれている存在全体である包括者を意識することによって、主観と客観の分裂において、暗号とかわる。「人間の現存在において、人間にとって明るさに達するものすべては、彼の意識の中に、思考の中にあり、常に、われわれが包括者と名づける根本的現実性から、突然客観的であると同時に主観的である何かあるものである。」⁷⁵⁾そして人間は、包括者を意識することにおいて、超越者と自己存在の関係に気づく。「私がたった今述べたように、包括者が意識において明らかになる時、この人間的に思惟する意識の形式において、人格的神の客観性と人間の自己存在の主観性とが突然そこにある。この両者は、重なり合って関係している。」⁷⁶⁾したがってヤスパースは、次のようにいうことができると考える。「超越者が人格的神の暗号を引き受ける程度に応じて、同じような程度において人間の人格性は発展する。人間は人格、個人になるこ

とができるので、人間はそうなることによって、神の人格の暗号において、分裂するこの包括者の内の超越者のこの客観性にかかわる。」⁷⁷⁾

5. 超越者の言葉としての暗号

ヤスパースによれば、人間存在は、絶え間ない精神的な円環において、異質な根源に出会うこと、力の限り交わりに入ること、それからまったく本質的に異なっている内面的な人生を歩むことを意味する。彼は、「暗号は、超越者の現実の言葉であり、超越者そのものではない。暗号は、未決定で、多義的であり、普遍妥当的ではない。暗号の言葉は、われわれの悟性にとって聞くことができず、可能的実存としてのわれわれにとってのみ聞くことができる」⁷⁸⁾と述べている。可能的実存としてのわれわれは、超越者を暗号である言葉として感得する。また彼は、「暗号の世界は、精神的闘争の場である。暗号の世界において、人間はお互いに出会い、自己自身となる。人間の交わりは、暗号の中に現われる動きにある。このこと自体は、再び暗号の中で能力によって話し合われる」⁷⁹⁾という。したがって、思惟されたこと、思惟しつつ行なわれたこと、行動されたことに対する反省において初めて、われわれが述べ聞くことの妥当性の意味を解明することによって初めて、われわれは哲学的に真実になる。

ところで、ヤスパースは、哲学は、われわれに解放をもたらしたが、自由をもたらさなかったと指摘する。「予言的哲学は、その知識を理性的洞察によってただ真実なものとして他の知識を排斥しながら、所有し教えることができたが、もはや不誠実なしには存在しない。」⁸⁰⁾そして哲学が、最初のものとして最後のものとして欲するものは、真理であるが、だれも真理を所有しないので、その欲するものは真実性の要求である。「真理のために無制限に努力することは、人生の意義の条件である。この努力は、すでに無批判な真理の熱狂の中で真実でなくなり消える真理への情熱において最も崇高な思慮深さと安らぎを求める。」⁸¹⁾また、

人間は絶えず可能性を求めて歩むが、決して完成とはなりえない。ヤスパースは、「人間にとって可能であるべきだが、現実では不可能である最も高貴なものへの要求、天の父が完全であるように、完全であるべき要求は、われわれ人間が不完全で断念することを明らかにする」⁸²⁾と述べている。神は完全であるが、われわれ人間は不完全であることを自覚しつつ、真理を探究する努力を続けていかなければならない。

ヤスパースによれば、哲学することは、いわば二つの翼を持っている。一つは、伝えることができる思惟の努力で、つまり普遍的なものの教説で羽ばたき、他は単独者の実存でこのような思惟をもって羽ばたく。両方の翼が協同してのみ、飛躍に達する。思惟しつつものがものにするこの熟慮において、実生活のみが生活実践で持っているものに対して明晰が獲得される。したがって、「哲学は、おのおのの単独者が哲学によってではなく、超越者によって自己自身に贈られ、彼の実存によって決断するところへ導く。」⁸³⁾そしてヤスパースは哲学で学んだことについて、「私は、哲学によって忍耐、そして謙虚を学んだが、思惟しつつ、覚悟し回想するべき活動へ絶えず呼びかけられる」⁸⁴⁾と述べている。

ヤスパースによれば、「哲学する者は、情け容赦のない運命が人間自身によって人間に設定した課題を最終的に果たすことは、人間にとって可能でなければならないと信じる。」⁸⁵⁾その一方で、「しかしまた哲学する者は、単なる失敗ではない挫折において現われる超越者を、すなわちわれわれがわれわれの実存へ達し、愛する限り、このような挫折においてもなお属している時間から無制限の永遠性を信じる。」⁸⁶⁾すなわち哲学者は、人間とは何か、存在とは何かという問いに答えることの可能性を信じるが、またそれが挫折した時に超越者とその永遠性を確信する。そこでヤスパースは、「哲学は常に考え方の革命であったし、今日でもそうである」⁸⁷⁾という。つまり哲学は、常に新たな思考を求めて続けてきた。「しかし、

人間自身に贈られるところで、哲学は現在のものへの気高い愛によって、今日、そしていかなる他の時代でもなく、生きていることへの感謝によって支えられている。」⁸⁸⁾

むすび

ヤスパースにおける暗号概念は、彼の後期哲学において中心概念の一つである。それは、哲学的信仰において暗号が不可欠な概念であることを意味している。哲学的信仰は、主観と客観を包括する包括者の解明を前提とし、実存と超越者との関係において成立する。暗号は、超越者そのものではなく、超越者の言語であり、いわば超越者自身が発する言葉である。実存は、その言葉の意味を、実存的経験を通して解読する。すなわち、超越者が伝達する言葉を、実存の自由のみが聞き取る。したがって実存は、超越者との自由な関係において存在する。

実存が超越者の言葉を聞き取る時、暗号の領域における闘争が始まる。そこでは、暗号をどのように読み取るかというわがものにするための闘争が起こる。暗号における闘争は、超越者に関係づけられ、真理のための厳しい闘争が行なわれる。暗号において相互に理解し合うことは、可能的実存同士の交わりを意味する。超越者と関係する実存同士が向き合い、厳しく誠実な対話をする実存的交わりでは、「愛しながらの闘い」が実現する。

ヤスパースは、人間が暗号をどのように解読し、把握するかは、その人間がどのような人間になるかに関係すると考える。彼は、人間が超越者をどのように捉え、何を偉大と見るかによって、その人間がどのような生き方をし、どのような人間となるかを決定すると強調する。

ヤスパースによれば、自由は実存的経験である。人間にとって、自由があるところでは責任があり、また責任があるところでは負目がある。自己は、責めを負い、負目を引き受けることによって、実存となりうる。人間は、実存の歴史性において存在する。決定的なことは、暗号は歴史的で

あり、形態において一回であるということである。

哲学は、真理を探究しようとするが、われわれ人間は完全ではなく、不完全であるから、完全な真理に到着しえない。だから人間は、少しでも完全なものを求めて真理に近づこうとするのである。ヤスパースは、哲学者は、真理を探究しつつ、挫折することによって、超越者とその永遠性を確信すると考える。

実存は、超越者との関係において存在する。暗号を解読し超越者と連繋することは、暗号として暗示されるものを自己がどう生きるべきかを示唆する契機であると自覚することを意味する。それゆえ、人間が自己の良心に従い、自己の人生を前向きに歩む途上で、暗号を感得し解読するので、暗号は実存の倫理的生き方を示唆するものであるといえよう。

注

- 1) Karl Jaspers, Gesamtausgabe, Der philosophische Glaube angesichts der Offenbarung, Band I /13, Schwabe Verlag Basel, 2016, S.213.
- 2) ibid., S.213.
- 3) ibid., S.214.
- 4) ibid., S.215.
- 5) K.Jaspers, Kleine Schule des philosophischen Denkens, R.Piper & Co. Verlag, München 1965, 1974, 8. Aufl. 1983, S.133.
- 6) Vgl. Paul R. Tarmann, Ethik in Freiheit, Zur Grundlegung politischen Denkens bei Karl Jaspers, Peter Lang GmbH, Frankfurt am Main 2016, S.131-132.
- 7) ibid., S.132.
- 8) ibid., S.133.
- 9) Karl Jaspers Gesamtausgabe, Der philosophische Glaube angesichts der Offenbarung, Band I /13, a.a.O., S.215.
- 10) ibid., S.216.
- 11) K.Jaspers, Kleine Schule des philosophischen

- Denkens,a.a.O.,S.144.
- 12) Paul R.Tarmann,Ethik in Freiheit,a.a.O.,S.134.
- 13) Karl Jaspers Gesamtausgabe,Der philosophische Glaube angesichts der Offenbarung,Band I /13,a.a.O.,S.220.
- 14) K.Jaspers, Kleine Schule des philosophischen Denkens,a.a.O.,S.138.
- 15) Karl Jaspers Gesamtausgabe,Der philosophische Glaube angesichts der Offenbarung,Band I /13,a.a.O.,S.224.
- 16) *ibid.*,S.224.
- 17) *ibid.*,S.226.
- 18) *ibid.*,S.228.
- 19) *ibid.*,S.229.
- 20) *ibid.*,S.239.
- 21) *ibid.*,S.241.
- 22) *ibid.*,S.247.
- 23) *ibid.*,S.248.
- 24) *ibid.*,S.248.
- 25) *ibid.*,S.249.
- 26) *ibid.*,S.249.
- 27) *ibid.*,S.249.
- 28) *ibid.*,S.251.
- 29) *ibid.*,S.252.
- 30) *ibid.*,S.254.
- 31) *ibid.*,S.255.
- 32) *ibid.*,S.258.
- 33) *ibid.*,S.259.
- 34) *ibid.*,S.260.
- 35) *ibid.*,S.261.
- 36) *ibid.*,S.261.
- 37) *ibid.*,S.262.
- 38) *ibid.*,S.265.
- 39) *ibid.*,S.266.
- 40) *ibid.*,S.268.
- 41) *ibid.*,S.270.
- 42) *ibid.*,S.271.
- 43) *ibid.*,S.286.
- 44) *ibid.*,S.289.
- 45) *ibid.*,S.289.
- 46) *ibid.*,S.316.
- 47) K.Jaspers, Chiffren der Transzendenz,R. Piper GmbH & Co.KG,München 1970,4. Aufl.,1984,S.44.
- 48) Karl Jaspers Gesamtausgabe,Der philosophische Glaube angesichts der Offenbarung,Band I /13,a.a.O.,S.323.
- 49) *ibid.*,S.326.
- 50) *ibid.*,S.326.
- 51) *ibid.*,S.331.
- 52) *ibid.*,S.335.
- 53) *ibid.*,S.337.
- 54) *ibid.*,S.376.
- 55) *ibid.*,S.376.
- 56) *ibid.*,S.395.
- 57) *ibid.*,S.395.
- 58) *ibid.*,S.407-408.
- 59) *ibid.*,S.425.
- 60) *ibid.*,S.428.
- 61) *ibid.*,S.430.
- 62) *ibid.*,S.431.
- 63) *ibid.*,S.432.
- 64) Vgl. K.Jaspers, Chiffren der Transzendenz,a. a.O.,S.7.
- 65) *ibid.*,S.8.
- 66) *ibid.*,S.8.
- 67) *ibid.*,S.16.
- 68) *ibid.*,S.29.
- 69) *ibid.*,S.36.
- 70) *ibid.*,S.43.
- 71) *ibid.*,S.44.
- 72) *ibid.*,S.44.
- 73) *ibid.*,S.48.
- 74) *ibid.*,S.50.
- 75) *ibid.*,S.60.
- 76) *ibid.*,S.61.
- 77) *ibid.*,S.61.
- 78) *ibid.*,S.97.

- 79) *ibid.*,S.99.
- 80) *ibid.*,S.103.
- 81) *ibid.*,S.103.
- 82) *ibid.*,S.104.
- 83) *ibid.*,S.107.
- 84) *ibid.*,S.107.
- 85) *ibid.*,S.108.
- 86) *ibid.*,S.108.
- 87) *ibid.*,S.108.
- 88) *ibid.*,S.108.

参考文献

1. カール・ヤスパース, 重田英世訳『啓示に面しての哲学的信仰』創文社, 1986年.
2. カール・ヤスパース, 草薙正夫訳『神の暗号』(ヤスパース選集37)理想社, 1982年.
3. カール・ヤスパース, 松浪信三郎訳『哲学の学校』河出書房新社, 1980年.

